

## ◎ル・コルビュジェ

### Le Corbusier, 1887-1965

20世紀を代表する建築家の一人で出身国のスイスから、パリに拠点を移して活躍しました。建築のみならず絵画、彫刻、家具などにも取り組み、個人住宅から国連ビルの原案まで幅広い創作活動を展開しています。合理的、機能的で明晰なデザイン原理を絵画、建築、都市等において追究し、20世紀の建築、都市計画に大きな影響を与えました。「近代建築の5つの要点」(ピロティ、屋上庭園、自由な平面、横長の窓、自由なファサード)を提唱し、近代建築の父のひとりに数えられています。

## ◎本館

第二次世界大戦後、フランスに差し押さえられていた松方コレクションの寄贈返還を受けるために設立された、日仏間の国交回復・関係改善を象徴する歴史的建造物です。ル・コルビュジェの設計により、1959(昭和34)年に竣工しました。2007(平成19)年12月には「国の重要文化財(建造物)」に指定されています。

国立西洋美術館を含む「ル・コルビュジェの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—」は、2016(平成28)年7月に開催された第40回世界遺産委員会において、世界文化遺産への登録が決定されました。

### 国立西洋美術館 本館

階数	地上3階、地下1階
構造	鉄筋コンクリート造
設計	ル・コルビュジェ
監理	坂倉準三、前川國男、吉阪隆正
着工	1958(昭和33)年3月
竣工	1959(昭和34)年3月



## ル・コルビュジェの建築を知るためのキーワード

### ■モデュール

ル・コルビュジェが考えだした、建築の寸法を決めるルールで、黄金比と身体のサイズを利用してつくった定規です。たとえば、人(183cmのヨーロッパの男性)が手をのばした高さ(226cm)を住宅の天井にちょうどよい高さで定めました。このようにして、建物、部屋、さらに家具の大きさなども「モデュール」で決めています。

### ■無限成長美術館

ル・コルビュジェは、巻貝が中心から出発して外に向かっていくように、コレクションが増えるにしたがって、建物の外側に展示室を追加していくことのできる「無限成長美術館」を構想していました。無限成長美術館の原理(緑字)と、国立西洋美術館本館に実現されたその特徴は以下のとおりです。

#### 1 | ピロティ

本館正面には柱で支えられたピロティの空間があります。→マップ12

#### 2 | 建物中心のホール

本館の中心に置かれた19世紀ホールが出発点となります。→マップ1、2、3

#### 3 | 四角い螺旋状の空間

19世紀ホールを出発し、四角いホールの周囲を螺旋状にぐるりと回るように展示室を歩いていきます→マップ5

#### 4 | 中3階

2階の展示室から見上げると、円状に配された照明ギャラリーと中3階が見えます→マップ4

#### 5 | 柱と柱の間/柱の高さの寸法の基準化

ル・コルビュジェの案はそれぞれ7m、4.5mですが、本館の場合はモデュールを取り入れた6.35mと2.96mとなっています。

#### 6 | 見通しのある空間

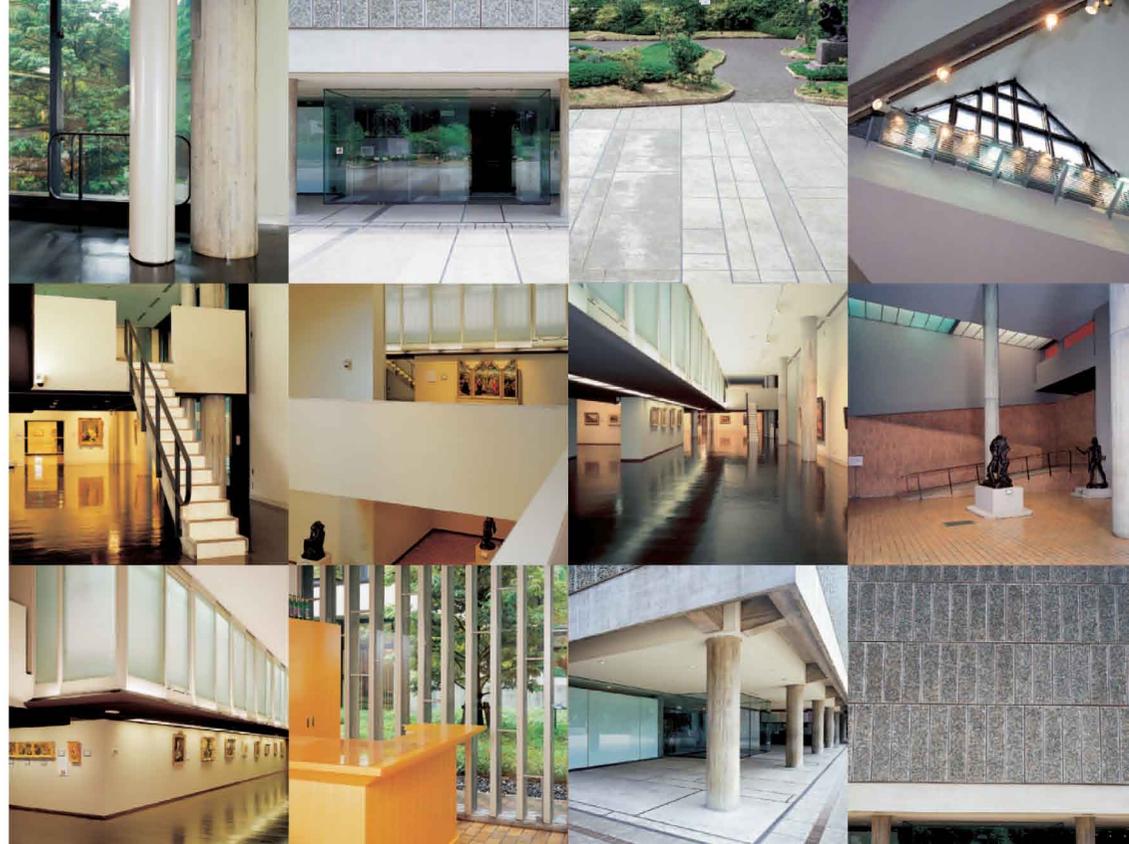
展示室を小さな部屋に区切らずひと続きの空間とすることで、全体を見通すことが容易になります。→マップ5

#### 7 | 規格化

建築材や建物の寸法を規格化することで、経済的に建物を作ることができます。

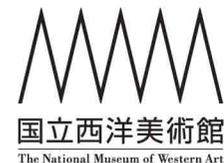
#### 8 | 美術館運営にあわせた豊かな組み合わせ

美術館側がさまざまな展示を行えるように、大小の仮設壁や中3階などバリエーションのある空間が、当初、用意されていました。



美術館には、絵や彫刻と同じくらい重要なものがあります。それは建築。

フランスで活躍した建築家ル・コルビュジェは、コレクションの増加にともない建物も増築していく、『無限成長美術館』を考案しました。1959年に完成した本館は、この考えをもとにしてできた美術館です。また、ル・コルビュジェは、身体のサイズを利用した「モデュール」という特別な定規や、新しい時代の建築にふさわしい様々なアイデアを、本館に採用しました。この建築探検マップには、それらを確かめることのできる14のチェックポイントがのっています。ル・コルビュジェの美術館をスミからスミまで探検してみましょう。





### 1. トップライト

19世紀ホールの天井部分に三角形にあげられた北向きの明かりとりの窓です。トップライトからの自然光で、晴れた日にはホール全体が明るく見えます。

### 2. 床照明

19世紀ホールの床下に、作品を下から照らすライトが取り付けられていました。現在は使われていません。

### 3. スロープ(斜路)

ル・コルビュジェの建築によく用いられる斜路が、19世紀ホールと2階を結んでいます。階段とは異なり、空間の変化をゆっくりと楽しみながら上の階に移動することができる建築的プロムナード(散策路)です。

### 4. 中3階

2階展示室には、中3階が3か所つくられています。幅のせまい階段を上ると、小さな作品を展示する予定だったスペースがあります。現在は使われていません。

### 5. 見通しのよい回遊空間

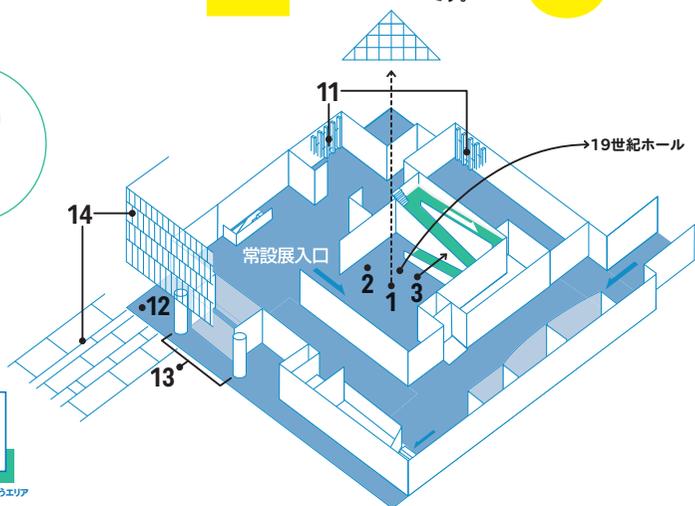
2階展示室は、角を曲がると同じような景色がまた現れる不思議な空間です。壁が所々で切れることで見通しが生まれ、来館者は、途切れることなくつぎつぎに現れる展示空間を回遊することができます。

### 6. バルコニー

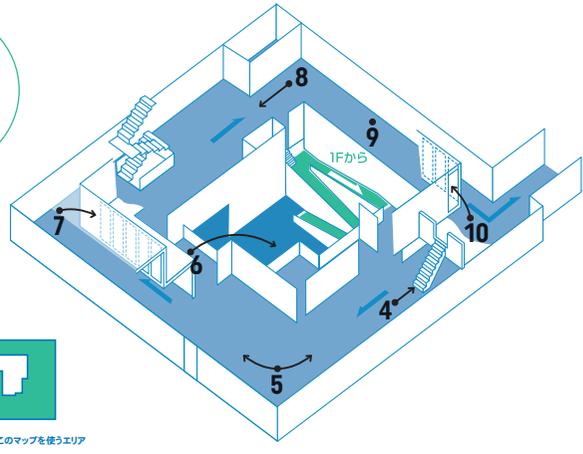
2階展示室には、19世紀ホールにむけて、壁を突き抜け2か所にバルコニーが設けられています。そこからホールを見下ろしたり、もうひとつのバルコニーの奥の展示室を見ることができ、この建物の複雑な空間を感じることができます。

### 7. 天井の高さ

2階展示室の天井は、高い部分と低い部分が組み合わされています。歩くにつれて空間の広がりや変化を楽しむことができます。低い天井はモデュールで決められた226cmで、高い天井はその2倍にバルコニーの床の厚さを加えた寸法です。



ル・コルビュジェの無限成長美術館(本館)の探検のための14のチェックポイント



### 8. 独立柱

この建物は多くの円柱で支えられています。柱の直径は当初53cm、2階は43cmでしたが、日本の基準に合わせて、各々60cm、55cmとなりました。重さを支えるために1階が太くなっています。姫小松の木の型枠にコンクリートを流し込んで作ったため木目が美しく浮き出しています。

### 9. 雨樋

通常は建物の外につけられる雨樋(縦樋)が、この建物では屋内にあります。ル・コルビュジェは室内に露出する雨樋のデザインや場所をいろいろ考えていました。

### 10. 照明ギャラリー

2階展示室の低天井の上にあるガラス張りの部屋は、屋上からとり入れた自然光を展示室に入れるための回廊空間(照明ギャラリー)でした。ル・コルビュジェのアイデアでは自然光も使って絵画を照明するはずでしたが、現在は人工照明のみを使っています。

### 11. 律動ルーバー

レストランのレジ近辺や、ミュージアムショップのガラスの外側にはり出した、縦長のコンクリートの細い板のことです。リズムカルに配置されることによって、室内に入る光にも変化が出ます。

### 12. ピロティ

美術館の入口の部分です。雨や強い日差しをさげることができる、ゆとりのある空間となっています。ここに彫刻を展示していたこともあります。

### 13. 柱と柱の間隔

建物を支える柱の中心から中心までの長さは、モデュールで決められています。

### 14. 石畳・外壁

前庭の床や外壁は、モデュールによって決められたさまざまな大きさの長方形に区切られています。

